



Title	貧困とスポーツ : ホームレスワールドカップが発信する物語
Author(s)	岡田, 千あき
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2016, 42, p. 141-161
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57226
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

貧困とスポーツ
—ホームレスワールドカップが発信する物語—

岡田 千あき

目次

1. はじめに
2. 研究の目的と方法
3. ホームレスワールドカップと日本の活動
4. ホームレスワールドカップにおける貧困像
5. 結論
6. おわりに

貧困とスポーツ —ホームレスワールドカップが発信する物語—

岡田 千あき

1. はじめに

開発と平和のためのスポーツ (Sport for Development and Peace: SDP) 分野は、1990年代半ばから急速に発展してきた。我が国でも東京五輪招致に際して「スポーツ・フォー・トゥモロー」「スポーツ国際貢献」の実施が国際的に約束され、開発学、スポーツ科学の複合領域として注目が高まっている。日本体育学会では、スポーツ国際開発分野の新設が検討されており、本分野の研究を進めることは、我が国の政策上、学術上の両方の意味において喫緊の課題であり、時代の要請でもある。

開発、平和構築の根本的な原因であり、課題の中心に位置しているのは、多くの場合は経済的な「貧困」である。日本政府が2015年に改定した「開発協力大綱」¹⁾では、重点課題として、①質の高い成長とそれを通じた貧困撲滅、②普遍的価値の共有、平和で安全な社会の実現、③地球規模課題への取り組みを通じた持続可能で強靱な国際社会の構築、の3点が明示されており、我が国においても貧困削減は開発・平和構築の肝と捉えられている。

スポーツが貧困の撲滅あるいは削減に貢献するというのは、一般的にはおとぎ話のような印象を与えるものである。しかし、おとぎ話に真剣に取り組む人々がおり、拡大を続けている世界的な活動がある。ホームレスワールドカップは、世界各国のホームレスのみが参加できるフットサルの世界大会であり、「ホームレス状態を社会からなくすこと、ホームレス状態にある人々が自らの人生を変えるきっかけを作ること」²⁾を目的に2003年に開始され、以後、2015年まで毎年1回、様々な国において開催されている³⁾。

一連の活動の中では、ホームレスワールドカップの開催、すなわちサッカーやフットサルを行うことが人々を自立に向かわせ、貧困問題の緩和につながるという物語が発信されている。国によって自立の定義は異なり、貧困問題の性質も全く違うが、異なる社会背景を持つ国々において、「貧困」という共通の課題へのアプローチ方法としてスポーツに期待された役割は大きい。

2. 研究の目的と方法

2-1. 研究目的

本研究では、日本チーム「野武士ジャパン」を中心とした複数の事例から、ホームレスワールドカップに期待された役割を探ることを目的とする。そのためにホームレスワールドカップや野武士ジャパンについて発信された情報や、活動を題材に創られた成果物を検証するが、これらの情報や成果は、活動によって産み出されたアウトプットの一つであり、すなわちホームレス問題へのアプローチの一つの形であるともいえる。したがって、本研究は、ホームレスワールドカップや大会に付随する活動の成否や結果を評価する性質のものではなく、「貧困削減」と「スポーツ」の関係性を理解する研究の端緒と位置づける。

2-2. 研究方法

ホームレスワールドカップにおける参与観察、選手や関係者へのインタビュー調査、映像資料の検証を併用した。参与観察は、2011年パリ大会（フランス：2011年8月21日～28日開催）、2015年アムステルダム大会（オランダ：2015年9月12日～19日開催）、2015年7月に行われたダイバーシティカップ⁴⁾のほか、日本チーム野武士ジャパンの日常練習（大阪複数回、東京3回）、選手選考等のイベント、スポーツ・フォー・ソーシャルインクルージョン実行委員会への参加が中心である。

インタビュー調査は、2011年1月～2015年8月の間に、野武士ジャパンの選手や関係者計34名に対して個別インタビューを中心に、一部についてグループインタビューを行った。また、2011年8月のパリ大会で8名、2015年のアムステルダム大会で5名、さらに2014年2月には韓国のパートナー団体であるビッグイシュー 코리아において7名の関係者にインタビューを行った。インタビューの実施場所は、東京、大阪、パリ、アムステルダム、ソウルの団体の本部や事務所、練習場所、大会開催場所、喫茶店などであり、日本語か英語を用いて直接、対面した上で行った。

調査者は、ボランティア、実行委員会のメンバーとして、これらの活動に参画する機会があり、インタビュー調査外の時間でも被調査者に聞き取りを行ったり、会話を交わす場面があった。また、調査対象外の関係者とインフォーマルな形で議論を行うこともあり、これらの場所で得た知見や情報も研究結果に反映している。

映像資料、演劇資料として以下の3点を取り上げた。

1) “Kicking it” (邦語版『ホームレスワールドカップ』)

スーザン・コッホ、ジェフ・ウェルナー監督によるドキュメンタリー映画。南アフリカ、スペイン、アフガニスタンなどの選手の大会出場までの道のりと変化を追った作品である。



写真1：“KICKING IT”，“ホームレスワールドカップ” DVD

2) “Hors-Jeu Carton rouge contre l’ exclusion”

(オフサイド：社会的排除へのレッドカード)
フランスのテレビ局が2011年に放送した、日本、アルゼンチン、パレスチナ、フランス、ケニアの国内での活動を取り上げた90分のドキュメンタリー番組である。本作品の日本チームと関係する場面については、映像から文字に興した上でフランス語から日本語への翻訳を行った。



写真2：Hors-Jeu Carton rouge contre l’ exclusionho-mu-pe-jiyor の一部

出典：番組ホームページ

3) “NO GOAL”

劇団「青春事情」によって2013年7月10日～14日、2014年6月27日～7月1日に下北沢駅前劇場で上演された舞台である。日本チーム野武士ジャパンを題材としており、NPO法人ビッグイシュー基金が企画協力を行った。舞台公演のDVDが販売されている。



写真3：“No Goal”プログラム
出典：劇団青春事情

3. ホームレスワールドカップと日本の活動

3-1. ホームレスワールドカップとは

ホームレスワールドカップは、文字通りホームレスのみが選手として参加するフットサルの世界大会である。世界的に有名な社会的企業であるビッグイシュー⁵⁾のメル・ヤング氏らが創設し、2015年には65チームが参加して13回目の開催を迎えた。大会は開催国の実行委員会によって行われるが、日常の練習、選手選考、派遣などの各国における活動は、74のナショナルパートナーによって行われている。

3-2. 日本チーム「野武士ジャパン」

日本からは、NPO 法人ビッグイシュー基金（以下、ビッグイシュー基金）が派遣する「野武士ジャパン」が、2004年イエテボリ大会、2009年ミラノ大会、2011年パリ大会に出場した。ビッグイシュー基金は、ホームレス状態にある人々⁶⁾に、①生活自立応援プログラム、②就業応援プログラム、③スポーツ文化活動応援プログラム、④市民の社会参加活動プログラムを提供しており、大会参加までの一連の過程は、③スポーツ文化活動応援プログラムの一つである。定期練習を含めたフットサル活動では、①ホームレスの人たちに趣味・楽しみになることを通じて「希望」をつくる、②フラットなコミュニケーションの場を提供し、人とのつながりを回復する、③ゴール・勝利、ささやかな成功体験の積み重ねで「自信」や「諦めない気持ち」を生み出す（長谷川、2011）ことが目的とされている。

野武士ジャパンにおけるフットサル活動について、担当責任者は、「多くのホームレスの人は、ホームレスになる過程で、家や仕事だけでなく、人とのつながりや生きる目標や希望を失いホームレス状態になっています。（中略）また、ホームレス状態というのは、『食べ物がない』、『仕事がない』というだけでなく、何か相談をしたいと思った時に相談をする相手がいないといった孤立の問題を抱えています。さらに、ホームレス状態から脱しようと思った時にも必要な情報へアクセスすることが難しい、といった問題があります。サッカーといったチームスポーツは、そうした社会的孤立状況にいる人にとって、人とのつながりや生きがい、目標や希望を取り戻すきっかけの1つになっているのです⁷⁾と述べている。野武士ジャパンの活動では、ホームレスワールドカップへの出場が目標とされているものの、年によっては出場を目指さないこともあり、東京、大阪で月2回行われる練習会が活動の中心である。その他、関係団体との練習試合や民間企業と連携した練習会と学習会の開催など、フットサル活動をきっかけとし、特に他団体との交流という意味において様々な成果を産み出している。

ビッグイシュー基金は、2008年のリーマンショック後にホームレスの若年化⁸⁾に対する危機感を持っていた。若いホームレスはネットカフェや24時間営業の飲食店、友人宅などに滞在していることが多く、一見しただけではホームレス状態にあることの判別が難しい。問題の深刻化を懸念した関係者が連携して開催した「若者ホームレス支援ネットワーク会議」では、「ホームレス問題、ニート・ひきこもり問題、障害者の問題、養護施設等で育つ子供たちの抱える問題などが、全て地続きである」（ビッグイシュー基金、2013）ことが明らかになった。加えて、諸機関が連携して対策を立てなければ、急増する若者のホームレス予備軍が、団塊の世代の両親の年金が途切れるころに一斉に路上に掘り出される可能性がある（岡田、2014）ことも指摘された。これらの連携の中で、フットサル活動が、特に若者ホームレス問題に有効なアプローチになり得るのではないかとこの声は断続的に挙げられた。そこでビッグイシュー基金は、野武士ジャパンの活動を継続しながら、新たな取り組みとして図2のダイバーシティカップ⁹⁾を開催した。

ダイバーシティカップ概要

- 日時 2015年7月4日(土)9時～13時
- 会場 国立代々木競技場フットサルコート
- 参加 10チーム(路上生活経験者、若年無業者、ひきこもり経験者、うつ病経験者、養護施設出身者、被災地の若者、LGBT当事者、不登校経験者、ニート状態の人など)
- 試合形式 7分ハーフ(4チームのリーグ戦)⇒順位決定戦
- 主催 スポーツフォーソーシャルインクルージョン実行委員会
／認定NPO法人ビッグイシュー
- タイムテーブル
 - 9:00 開会式(ルール説明+アイスブレイク)
 - 9:50 キックオフ(1コート・2コート)
 - 13:00 閉会式(2コート)
 - 13:15 終了
 - 13:30～16:30 食事・交流会
 - (18:00～20:00 フットサルコートにて自由参加のゲーム)

図2 ダイバーシティカップ概要

ホームレスワールドカップへの参加にあたって、複数の団体による取り組みを基盤にしている国もあれば、全国で行われる予選会を通過した本選出場者の中から選手選考を行う国などもある。例えば、2015年大会で男女共に優勝を勝ち取ったメキシコでは、大会出場にあたって約28,000人の中から8人を選抜していた。若者ホームレス問題を始めた社会的課題への対応、さらには、より多くの有資格者の中からホームレスワールドカップに参加する日本代表を選考する必要性といった双方向からのニーズを受けとめる形で第1回ダイバーシティカップは開催された。

4. ホームレスワールドカップにおける貧困像

4-1. 文章で伝えられる貧困とスポーツ

ホームレスワールドカップは、“The Homeless World Cup Foundation”により運営されているが、そのホームページには、主に①大会情報の発信、②各国チームの紹介、③寄付募集および公式グッズの販売に関する情報が掲載されている。年1回の大会開催期間中は、大会情報がコンテンツの大半を占め、試合結果と共に選手やコーチ、観客の声などが掲載されている。大会終了後の一定期間を経ると、各国チームの紹介、寄付募集や公式グッズの販売が主要な位置を占める一方で、Facebook ページでは、年間を通じて各国チームや選手、審判、ボランティア、メディア、サポーターなどの「個別の声」に

焦点を当てた情報が発信されている。Facebook ページには、2015年9月10日現在、約3万9000件の「いいね！」が押されており、ユーザーレビューの平均点が4.7を記録するなど高い反響がある。

日本チームを主宰するビッグイシュー基金は、公式ホームページ内に「ホームレスサッカープロジェクト」と題したブログを有している。さらに Facebook「野武士ジャパンホームレスサッカー（応援ページ）」と「野武士ジャパン公式サイト」を通じて日常の活動内容を発信している。ブログでは、活動風景の写真を短い文章で説明しており、近年はその役割を Facebook に移行しつつある。より詳しい情報は、「野武士ジャパン公式サイト」に集約されており、「活動実績」や「メディア掲載一覧」などのページが情報を蓄積し、過去に遡ってコンテンツを閲覧できる仕組みとなっている。ブログ、Facebook、公式ホームページのいずれにおいても、写真を多く用いており、活動の雰囲気を分かりやすく伝える取り組みがなされている。

公式ホームページでは、2011年のパリ大会出場者が執筆した第15話で構成されるエッセイ「ホームレスおっちゃんのワールドカップ戦記」が掲載されていた¹⁰⁾。大会やチームの様子がつづられており、人間関係やホームレス生活の困難などが垣間見える一方で、軽快な語り口から大会の熱狂や選手の高揚した様子も伝わる。

最初は、運動のためと気軽にはじめたサッカーだったのだが、やっていくうちに楽しくなった自分。そして、日本チームがワールドカップ出場へ向けて動き出すと知った時に、ただのサッカーが目標・夢に変わった。自分も選ばれるとは思わなかったが、夢を持ったことで毎日が少しは楽しめたし、一歩前へ踏み出すことができた。そして、選ばれたことによって、ホームレスからというか、路上から脱出するための手続きをできる気持ちにもなった。このパリ大会がきっかけであったことは本当である。そして、パリ大会での悔しさや難しさを多く学んだ。

ほぼ毎日のように選手たちはぶつかり合った。その時、感じたのは本音でぶつかり合うことの大切さと難しさであった。（パリ大会主将 M さん）

ホームレスワールドカップや野武士ジャパンの活動内容を伝えるだけでは、ホームレス支援の一環と位置付けられているホームレスワールドカップやフットサル練習の意義は伝わりづらい。しかし、大会に参加した選手のインタビューやエッセイからは、各選手にとっての活動の意義を汲み取ることができる。2015年アムステルダム大会のページでは、一人のジンバブエ選手のインタビューが紹介されている。



写真4 2015年 アムステルダム大会ジンバブエ選手

出典：ホームレスワールドカップホームページ¹¹⁾

“I have a vision; I have a dream,” he says, consciously echoing the famous words of Dr. Martin Luther King, Jr. “One day, in my community, it will be better. We will be a community of educated young people.”（出典：同上）

「私には目標がある、私には夢がある」彼は、マーチン・ルーサー・キング・ジュニア牧師の有名な言葉を意識的に真似て言いました。「いつの日か私の住むコミュニティの暮らしが良くなる。教育を受けた若い人々のコミュニティになる」（筆者訳）

この文章の前には、選手が家を失った経緯やこれまでの人生における様々な困難が記されているが、この記事を目にした人の多くが、ジンバブエの選手が抱える固有の問題¹²⁾に初めて触れることになる。その上で発信される目標や夢、さらにはすくっと立って前を向く選手の写真は、深刻な日常にさした希望の光としてのホームレスワールドカップ大会の意味を伝える十分なメッセージ性を有している。

何かを文章で伝える場合には、書き手や発信者の主観に基づくものとならざるを得ない。一方で、主観的な文章、ましてやホームレスや貧困問題を正面から捉えた文章は読者を「関係のない世界」として遠ざける可能性を持つ諸刃の剣である。ホームレス生活の困難さや深刻さ、あるいは大会出場による自身や周辺の変化を伝える際に、文章が持つ一種の「重み」が重要である一方で、重みを和らげ、主観的な情報を客観視するための資料を提示する必要性は高い。

ホームレスワールドカップや野武士ジャパンのホームページに文章と共に掲載されている写真の多くは、文章によって提示された「重く」「暗い」事実とのバランスを取るかのように「前向きで」「明るい」ものが多い。大多数の人々にとって距離があるテーマであろう貧困やホームレス問題への窓口として、あるいは主観と客観のバランスを取るために、文章と写真の組み合わせが意味を有するであろう。

4-2. 映像で伝えられる貧困とスポーツ

日本を始め、複数の国が YouTube 上でチーム紹介や活動内容を記録した動画を公開している。多くの国々において、プロの映像作家がボランティアで撮影、編集を行っていると言われており、本格的な映像作品も散見される。2011年パリ大会からは、全試合が動画配信されるようになり、世界各国からインターネットを通じて大会を観戦することが可能となった。2015年アムステルダム大会では、新しくスポンサーとなった Southfields が撮影と編集を、EverSport が配信を担い、大会期間中に 84 試合のハイライト映像を配信し(述べ 8246 回視聴された)、加えて、「舞台裏」と称した各国の選手やスタッフのインタビューや試合以外のトピックを扱った計 29 本の動画も配信された¹³⁾。

これまでにホームレスワールドカップを題材にしたドキュメンタリー映画やテレビ番組も作成されている。2006年には、南アフリカ大会を題材とした映画“Kicking it!”がスーザン・コッホ、ジェフ・ウエルナー監督によって発表され、日本でも「ホームレスワールドカップ」として上映された。ケニアのマザレ難民キャンプ出身の選手は、日常生活の様子を背景に以下のように語っている。

今まで苦勞してきたよ 家は貧しくて 食べ物は満足にない 学校にも行けない
サッカーを始めてやっと希望が見えた 一生懸命にサッカーの練習をした 成功すれば
苦しい生活から抜け出せる 幸せになれると思った(中略) いつも考えるのは
サッカーのことばかり サッカーのために生きているようなもんさ サッカーをして
なかったら今頃死んでるかも 今僕の未来は南アフリカにあるんだ いつかこんな
生活も終わる トイレ掃除ともおさらば プロのサッカー選手になるんだ サッカー
で生きるという夢をかなえるよ

(ホームレスワールドカップ南アフリカ大会ケニア代表 アレックス選手)

真剣にプロ選手になることを目指していたアレックス選手は、南アフリカ大会を自分の技術のアピールの場と捉えており、チームの連携を考えたプレイをしないばかりか監督の指示にも従わず、試合に出られなくなった。更にケニアチームは、最上位グループでの決勝に残ることが出来ず、自身の実力やプロ選手になることの厳しさを痛感することとなる。アレックス選手の大会を通じての焦りや逡巡、監督との諍いなどは文章や写真では説明が難しい。しかし、映像から見られる表情や言葉、しぐさやプレイ、あるいは他の選手やコーチとのやりとりはアレックス選手の葛藤を如実に物語っており、参加した多くの選手達が経験したであろう心的変化を想起させる。ちなみにアレックス選手は、帰国後にケニアのホームレスチームのコーチとなり、2008年メルボルン大会、2009年ミラノ大会に参加した。さらに2010年にはケニアのプロチームのコーチとなり、サッカーで生計を立てるといふ夢を当初描いていたものとは違う形で実現している。また、本作品の後半部では、アイルランドから出場していたある選手が取り上げられている。

サイモンは大会の4か月後 再び薬に手を染め死亡 1年半ぶりの使用でした
彼の死は社会の片隅に生きる仲間たちに衝撃を与えました
(字幕、映像 アイルランド代表サイモン選手)

ドキュメンタリー映像の中では、アレックス選手の夢の実現の過程やサイモン選手の大会後の変化については触れられていない。しかし、起点としてのホームレスワールドカップが、出場した選手たちに心的、社会的、経済的な大きな変容をもたらしたことは想像に難くない。本作品は次のように締めくくられている。

大会から1年 多くが生きがいを見つけ 3分の2が生活を改善しました
3分の1以上が定職に就き 93人が依存症を克服 半数が居住環境を改善 大半がサッカーを続けています たった一つのボールが彼らの人生を変えたのです
(“Kicking It!” ナレーター コリン・ファレル)

もちろん、ホームレスワールドカップへの出場が、すべての選手に正の影響を与えるわけではないことはサイモン選手の例からも明らかである。しかし、この“Kicking it!”の根底には、ホームレスワールドカップの正の影響を信じた、あるいは期待したような楽観的な明るさが流れている。一方、2011年にフランスのテレビ局が放映した90分のドキュメンタリー番組“Hors-Jeu: Carton rouge contre l’ exclusion” (オフサイド: 社会的排除へのレッドカード)はトーンが異なる。日本、アルゼンチン、パレスチナ、フランス、ケニアのバリ大会を目指す過程が描かれているが、日本については次のように始まる。

日本のホームレスチームの選考委員会は 毎年ひそかに1チームをこの大会に送っています それは日本政府が否定している「あること」のベールを取るための自発的で扇動的な選択です その「あること」とは ホームレスの数が全国で数万人にも及ぶという事実です
(“Hors-Jeu: Carton rouge contre l’ exclusion” ナレーション)

物語はある選手のインタビューを元に進む。現在の生活や心境が明かされた後に、フットサルを始めた理由などが語られる。

路上に住むと体を休めることが非常に難しいですね 自分でいい場所を探さなければいけないし 長いこと一人でいると自分が嫌になってしまったり精神的につらいです 時々ひどく落ち込んだり気分的に駄目になったりします
(“Hors-Jeu: Carton rouge contre l’ exclusion” 日本チーム M さん)

この選手は、選手選考に漏れるが、その結果発表後の心境をコメントしている。

実際 そんなにがっかりはしていません まあ もし来年ワールドカップに参加できる可能性があるのなら 次に向けて頑張ろうと思います

(“Hors-Jeu: Carton rouge contre l’ exclusion” 日本チーム M さん)

本作品では、前述の“Kicking it!”と異なり、全体を通して「暗さ」が見え隠れする。ホームレスワールドカップは、困難な日常に射す一筋の光として表現されており、選考に漏れた選手もが持ちえた「健気な前向きさ」を引き出したフックと考えられる。

映像にはいくつかのパターンが見られる。日常の活動や試合、大会の様子などを撮影・編集したもの、これらにインタビュー映像やコメントを加え、事実に基づいて再構成したもの、麻薬やアルコール依存など特定のトピックに焦点を当てたものなどである。共通点として、広く一般にホームレスや貧困問題を伝える窓口として分かり易く、問題がシンプルに表現されている。さらに、選手たちのプレイやユニフォームでインタビューに応える姿、生き生きと活動に取り組む様子が視覚化されており、これまでの貧困やホームレス問題を伝える手法とは明らかに異なっている。

一方で個々の選手が抱える問題の深刻さは製作者が意図的に見せなければ見えてこない。ホームレスワールドカップ出場選手のプレイや姿は、背景に潜む問題を覆い隠す効果があり、この特徴の使い方によって、サッカーやフットサルそのものの面白さは伝わったとしても、ホームレスや貧困にかかわるメッセージの伝わり方は大きく左右される。

4-3. 舞台上で伝えられる貧困とスポーツ

2013年7月10日～14日、2014年6月27日～7月1日に下北沢駅前劇場にて劇団「青春事情」による舞台「NO GOAL～ホームレスワールドカップ」が上演された。ビッグイシュー基金が企画協力を行った作品で、登場人物の役柄や背景の設定、実際のエピソードなどに2011年大会に出場した野武士ジャパンでの出来事が反映されている。舞台は、大会出場の半年前から暗転するごとに時間が進み、メキシコで行われた設定の大会最終日まで続く。日本国内およびメキシコ大会のロッカールームが再現されており、セットはこの2パターンのみである。

日本国内のロッカールームでは、新しいコーチを迎え入れるところから、チームとしての練習、渡航準備の様子などが描かれる。大会前の様々な困難を解決して乗り込んだメキシコ大会では、勝利を挙げることができずチームの雰囲気が悪くなり、選手同士のもめ事が起こる。しかし、大会の終わりにはチームとして戦う姿勢が生まれ、チームの結束を象徴的に見せる円陣の場面で舞台は締めくくられる。

舞台では、選手のみでなくボランティアや職員の変化や葛藤も描かれている。以下は、ボランティアコーチと派遣団体の職員とのやりとりである。

ボランティアコーチ（コ）：難しいよね

派遣団体職員（職）：え？

コ：チームとしてまとまって強くなって欲しいって思うけど 思うけど これじゃあサッカーってチームスポーツじゃない なのに みんななんか自分勝手に コミュニケーションの取り方が上手くないっていうか

職：不器用な人たちなんだよ

コ：何考えてるかよくわかんないし

職：どう表現したらいいかわかんないだけかもしれないよ

コ：こんなこと言いたくないけどさ やっぱ理由があるんだなって思った

職：え？

コ：そういう風になったのには理由があるなって

職：そういう風？

コ：仕事なくなったのとか

職：それはみんないろんな理由があるから

コ：理由はあるのかもしれないけどさ やっぱどっかで自業自得な部分があるって まあちょっと言いすぎかもしれないけど

(NO GOAL ボランティアコーチと職員のやりとり)

別のシーンでは、大会出発の2週間前にある選手のパスポートが未取得であることが判明する。支援団体から予め渡されていたパスポート取得代金をギャンブルで使ってしまったことが原因であった。この選手は事前に派遣団体の職員とギャンブルを辞める約束をしており、使い込みの事実に加えて、約束を反故にしたために大会出場が許されない事態に発展する。再びパスポート取得代金を借りることも認められなかったため、出場を願った他の選手とボランティアスタッフと共に金策に走る――。

時が進んでメキシコ大会のシーンでは、一人の選手の親族が現れ、ホームレスであることを公言するような大会に出場していることを責め、恥の意識から選手を帰国させようとする。無理やり連れ出されそうになる場面で、他の選手たちが親族を引き留め、その後、当該の選手が次のように述べる。

帰りません 俺は 帰りません それに 俺いなくなったらみんな迷惑するし 日本代表としてここに来てるんで 最後まで 大会が終わるまで 僕はここにいます 最後まで やらせて下さい (NO GOAL 選手のセリフ)

舞台はいくつかのエピソードと共に進んでいくが、前半は「個人」に焦点を当てたものが中心であった。舞台上には複数の選手やスタッフがいるものの、あくまで周辺とし

て描かれたものであり、選手のみでなくコーチやボランティアスタッフの中からエピソードごとに「主役」が設定されていた。しかし、中盤から後半の大会へと時間が進むにつれ、「チーム」が中心的に描かれるように変化しており、この集団が形作られていく過程こそが舞台上で表現されたホームレスワールドカップの価値ではないかと考える。

筆者は、2013年、2014年の舞台、2015年にDVDを鑑賞し、各作品について全く異なる印象を抱いた。同じ脚本でも演者によって、あるいは受け手の捉え方によって「違う」という事実には驚かざるを得なかった。受け手(筆者)の捉え方には、ホームレスや貧困問題、ホームレスワールドカップに対する理解、野武士ジャパンとの関わりの濃度などの影響が推測され、さらに観劇回数によっても感じ方に変化が生じるのかもしれない。筆者は、舞台作品について全くの門外漢であるためこれ以上の言及は避けるが、舞台が即時性を持ち、受け手は舞台を見ながらその場で考え、咀嚼することを求められると感じた。すなわち、その時々を受け手の有する情報の量と質、キャパシティに応じた感じ方にならざるを得ないのではないだろうか。ましてや一人一人の受け手によって捉え方、感じ方が大きく異なることは容易に想像することができ、そこに舞台の面白さと難しさがあるのかもしれない。

5. 結論

調査を通じて、ホームレスワールドカップの意義を「象徴」「媒体」「きっかけ」と表現する声が多く聞かれた。目標や到達点としてのホームレスワールドカップは、年に一度の国際大会であることに加えて、各国での日常的な活動の動機づけのための存在であった。本研究では、文章、写真、映像、舞台と様々な媒体によって切り取られたホームレスワールドカップの物語を検証したが、共通しているのは、選手個人や各国チームの個別のエピソードと、特に写真や映像で表現された「イメージ」としての大会の両者が表現されていることである。また、物語は、例えば分かりやすさと問題の深刻さ、親しみやすさと別世界の現実、勝利を追う前向きな姿と緩慢な日常、個別の事情とチームとしてのまとまりといったあらゆる意味でコントラストを描いている。ここには、発信者の伝える意図、対象、媒体によって濃淡や彩度が異なるものの「現実」を伝える部分と「演出」によって意図的に作られた部分が混在している。おそらくこのコントラストが、貧困やホームレスといったテーマに人々の関心を惹きつける鍵となるであろう。

本研究では、日本以外の作品も取り上げたが、日本において貧困やホームレスを取り上げる場合には別の視点での検討も必要である。日本における「貧困」の捉え方の特殊性について水島は、『自己責任』。非常に都合よい言葉だ。本来、責任を負うべき人たちにとって。知らず知らずのうちに私たちは『我慢すること』を強いられ、『自分のせい』と思込まされてきた。何かあれば『自己責任』を問う日本社会の冷酷さ。『自己責任病』と言っても良いほど我々の精神に浸透している」(水島、2007)と述べている。この社会

の根底を流れる風潮に加えて、貧困を伝える機会の貧弱さ、伝え方の難しさも大きな障壁である。日本において「貧困」が報道の表舞台に登場したのは2000年代後半と言われており、諸外国と比較すると歴史が浅い。この時期に、ドキュメンタリー番組『ニッポン貧困社会』(2006)、『ワーキングプア』(2006)、『ネットカフェ難民』(2007)などが放映され、『高学歴ワーキングプア』(2007)、『現代の貧困』(2007)、『ルポ最底辺』(2007)などの一般書が相次いで出版された。2007年には、反貧困ネットワーク¹⁴⁾が「貧困ジャーナリズム大賞」を設け、「貧困」を伝えることの意味づけを試みているが、貧困が日々のニュースで取り上げられる他国の状況と比較すると未だ貧弱であると言わざるを得ない。

様々な形で貧困を伝える必要性は高く、その意味で象徴としてのホームレスワールドカップの意義は見いだせるだろう。しかし、日本の場合は、自己責任論に加えて「清く、正しく、一生懸命にがんばる『健気さ』をお約束のように貧困者にまとわせていく」(水島、2007)という貧困を伝える際の特徴があると言う。また、水無田は、「同じような『かわいそう』な境遇にあっても、ちょこんと座って待っていておとなしくいうことを聞き、支援を受け入れる人たちは助けてあげるけど、そう見えない人たちは自分勝手にやっているから放っておくべきだ」¹⁵⁾という日本人に見られがちな発想に苦言を呈する。ホームレスワールドカップを伝えることが、出場するホームレス選手達に過度な頑張りや「可哀そうだが健気」といったステレオタイプのホームレス像、貧困像を押し付ける結果になることは避けなければならない。ホームレスワールドカップに出場した選手たちの自立に向けて前向きで、意欲にあふれた姿はある意味では真実である。しかし、本来は、そこに至るまでの葛藤や変遷、出場後、帰国後の姿も含めてホームレスワールドカップの意義が評価されるべきである。同時に「頑張る健気なホームレス像」を過度な演出によって偶像化することなく、ホームレスや貧困の問題に寄与する何らかの成果を個人個人に残すことが、媒体によっては表現が難しい部分のホームレスワールドカップの真の意義と言えよう。

日本と同じように貧困の自己責任論的風潮を持つ韓国では、ホームレスワールドカップへの出場者に「ストーリー性のある人物」を意図的に選出している。これまでの生い立ちや写真も含めて個人的情報をできるだけ公開できる人物を選出し、選手の「過去」「現在」「未来」を貧困を克服する(した)事例として様々なメディアにおいて紹介している。ここでは、社会全体に対するホームレス、貧困問題の「啓発」が主眼に置かれており、選手個人に対する裨益よりも数年後の韓国社会の変化を期待する戦略が採られている。

一人あたりのGNIが1,020US\$¹⁶⁾と未だ貧困問題が深刻であるカンボジアでは、貧困やホームレスが生活の中で身近な話題であるものの日本や韓国とは異なる理由で国内での啓発が難しい。カンボジアチームの派遣団体は、オーストラリアのHappy Football Cambodia Australia(HFCA)¹⁷⁾であるが、本団体では、英語での国際社会に向けた発信を主眼に置いている。カンボジアの現場での活動は、カンボジア人、オーストラリア人のコーチを中心に行われる一方で、団体の運営や大会出場に関わる業務は、オーストラリア、

アメリカ、カナダ、タイ、アイルランドといった各国のコアサポーターが、遠隔から手伝う形で進められている。HFCAは、Web ページ、Facebook、YouTube を用いて広く情報を公開する一方で、Web 上で無料の会員登録をした者には不定期にニュースレターを送信する。会員は活動状況に関する情報を得ると同時に、寄付やグッズの購入によって活動を支援し、さらなる支援に興味を持った会員の中からコアサポーターが生まれる仕組みである。

各国の貧困事情、ホームレス事情が異なる中、伝える対象や伝え方は異なるものにならざるを得ない。例えば、いくつかの国々では、寄付の依頼（ファンドレイジング）を情報発信の主目的に据え、寄付や援助の必要性を声高に主張することが可能な風土がある。社会問題が「社会的」であることを説明する必要はなく、問題に対するアプローチに関して「適切に」「素早く」「常に」情報を発信し続ければ理解は得られ、サポートを受けることができる (Grogan, 2015) のである。この前提に立てば、象徴、媒体、きっかけとしてのホームレスワールドカップの意義の検証は容易である。一方で、ホームレスや貧困にまつわる話題が身近ではない社会においては、ホームレスワールドカップを伝える前提である貧困、ホームレスの課題に対する「立ち位置」の説明からスタートせざるを得ない。しかし、この立ち位置の問題は、伝える者のみでなく、実は当事者、支援者、関係者の一人一人によって微妙なズレを持つものではないだろうか。そのために正確な意図を伝えることが困難であったり、誤解を生むことも多く、広く社会に伝える際の障害として立ちはだかる。しかし、このことは、見方を変えれば、先述したステレオタイプのホームレス像、貧困像を打ち破る可能性を持っているかもしれない、社会問題を伝える切り口の多様性を担保しているのである。

6. おわりに

ホームレスワールドカップは、複数の理由から伝えることが難しいとされていた貧困やホームレスの物語を伝播する装置としての意義を有することが明らかになった。しかし、誰に、何を、どんな目的で伝えるのが重要であり、より詳しく言えば、貧困やホームレスについて広く一般に啓発するのか、貧困問題に関心のある層に伝えるのか、スポーツ関係者に貧困問題への理解を促すのか、両者に関心のある少数のサポーターに向けて発信するのかによって取り得る手法も異なる。

本研究で取り上げた作品では、過去の生活から抜け出してサッカーでビッグになるといったアメリカンドリームが描かれている訳ではない。出場しているホームレス選手の多くが、以前の生活に戻っていくのが通常である、という事実を受け手が想起できるか否かが重要である。ホームレス選手の生き活きとした姿を映し出すことは、人々の親近感を呼び起こす一方で、彼らがおかれている厳しい日常に思いを巡らすこと、すなわち距離がある二つを結びつける想像力を受け手に求めているのである。

謝辞

本研究の実施にあたり、NPO 法人ビッグイシュー基金の長谷川知広様をはじめ関係者の皆様に、また、フランス語映像の日本語訳について平間亮太氏に多大なご協力をいただきました。深くお礼を申し上げます。本研究は、文部科学省科学研究費基盤研究 (A) 15H03071 の助成を受けて行いました。

注

- 1) 2015 年 2 月に閣議決定された日本政府の開発援助の基本方針を定めたものである。11 年ぶりに改定されたものであり、これまでは ODA 大綱と呼ばれていた。開発協力大綱には、初めて「国益の確保」が明記された。
- 2) Homeless World Cup ホームページ <http://www.homelessworldcup.org/> [2011/08/20] より引用の上、筆者訳。
- 3) 2015 年大会は 9 月にオランダで開催され、男女合わせて 65 チームが参加した。
- 4) ダイバーシティカップの開催に先立って「スポーツ・フォー・ソーシャルインクルージョン実行委員会」が組織された。ネット上で開催資金を集めるクラウドファンディングが行われ、100 万円の目標額に対して、1,065,000 円の寄付が集まった。
- 5) ビッグイシューは、ホームレスの仕事を生み出すことを目的にストリートペーパーを制作・販売している。1991 年にロンドンで生まれ、英国で 4 誌、世界で 9 誌（南アフリカ、ザンビア、ケニア、エチオピア、オーストラリア、韓国、台湾、日本）が販売されている。
- 6) ビッグイシュー基金は、「ホームレス」を、一般にホームレスと呼ばれる「屋根のない状態（野宿）」＝ルーフレス状態の人に加えて、「屋根はあるけど家のない状態（ネットカフェ、施設など）」＝ハウスレス状態の人と定義している。
- 7) クラウドファンディング“Moon Shot” ホームページ「ダイバーシティ・フットサルカップ 多様な背景をもつ人にスポーツ交流する機会を！」より。
<https://moon-shot.org/projects/102> [2015.09.02] 参照。
- 8) ビッグイシューでは、40 歳未満のホームレスを「若者ホームレス」と呼んでいる。若者の就職難や不安定な雇用形態、ブラック企業の問題などによって、20 代、30 代の貧困は確実に拡大している。
- 9) 大会には 146 名の選手、28 名のボランティアスタッフが集い、約 50 名の見学者の前で 28 試合が行われた。2 リーグに分かれた予選の後、上位、下位に分かれたトーナメント戦があり、試合後には、食事会と交流会も行われた。
- 10) かつて野武士ジャパンホームページに掲載されていたが、2015 年 9 月 20 日現在は掲載が控えられている。
- 11) ホームレスワールドカップホームページ <https://www.homelessworldcup.org/> [2015/09/18] のトップページにおいてジンバブエ選手のコメントと写真が掲載されて

いる。

- 12) ジンバブエは、2005年にムガベ政権下で“Murambativa”と呼ばれる政策が実行され、露天商などの不法営業、都市郊外の不法住居などが強制収容、破壊された。2万人以上が逮捕され、60万人以上が住居を失ったと言われている。
- 13) 2015年大会終了後の2015年9月20日現在。
YouTubeチャンネルの“Match Highlights”
(<https://www.youtube.com/playlist?list=PLnHc6ARgu0pN0RG8GXS-2yelmX7Jl8Jjp>)
および“Watch Behind the Scenes”
(<https://www.youtube.com/playlist?list=PLnHc6ARgu0pNoNlEUYB-bP0SdraEVFqOC>)参照。
- 14) 2003年に貧困の拡大を阻止することを目的に組織されたネットワーク団体。反貧困集会や反貧困フェスタを行っており、見えない貧困を見えるようにすること、そのために様々な団体や活動の連携が必要であることを訴えている。
- 15) AERA2015年2月23日号の対談記事『『貧困』は見せ物なのか』における水無田気流氏の発言。AERA第28号第8巻P.21-P.23の一部を抜粋。
- 16) 2014年の世界銀行のデータから抽出した。[http://data.worldbank.org/country/\[2015/09/30\]](http://data.worldbank.org/country/[2015/09/30])参照。
- 17) Happy Football Cambodia Australiaは、首都プノンペン近郊の4つの孤児院においてサッカー指導の活動を行っている。詳細は[https://hfca.org.au/\[2015/09/30\]](https://hfca.org.au/[2015/09/30])参照。

文献表

- Home, J. and Manzenreiter, W. (2006), *Sport Mega-Events – Social Scientific Analysis of A Global Phenomenon*, Blackwell Publishing Ltd.
- Magee, J. and Jeanes, R. (2013), Football’s coming home: A critical evaluation of the Homeless World Cup as an intervention to combat social exclusion, *International Review for the Sociology of Sport*, Vol. 48, pp.3-19.
- Sherry, E. (2010), (Re)engaging marginalized groups through sport: The Homeless World Cup, *International Review for the Sociology of Sport*, Vol.45, pp.59-71.
- 飯窪成幸 (2010), 『無縁社会—“無縁死” 三万二千人の衝撃—』, 文芸春秋
- 生田武志 (2007), 『ルポ最底辺—不安定就労と野宿—』, 筑摩書房
- 岩田正美 (2007), 『現代の貧困—ワーキングプア／ホームレス／生活保護』, 筑摩書房
- 岡田千あき (2011), 「生きる喜びを見つけるサッカーの旅」, 『体育科教育』10月号, 大修館書店, 70-71頁
- 岡田千あき (2012), 「なぜ貧しさの中でスポーツをするのか—ホームレスワールドカップ 日本代表『野武士ジャパン』の事例から—」, 大阪大学人間科学研究科編『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第38号, 59-78頁

- 岡田千あき (2014), 『サッカーボールひとつで社会を変える』, 大阪大学出版会
- 小林明子 (2015), 「『貧困』は見せ物なのか」, 朝日新聞出版編『AERA』2015年2月23日号, 21-23頁
- スポーツ・フォー・インクルージョン実行委員会 (2015), 『ダイバーシティカップ報告書』, スポーツ・フォー・インクルージョン実行委員会
- 特定非営利活動法人ビッグイシュー基金 (2010), 『若者ホームレス白書』, 特定非営利活動法人ビッグイシュー基金
- 特定非営利活動法人ビッグイシュー基金 (2012), 『若者ホームレス白書2』, 特定非営利活動法人ビッグイシュー基金
- 特定非営利活動法人ビッグイシュー基金 (2013), 『社会的困難を抱える若者の支援プログラム集』, 特定非営利活動法人ビッグイシュー基金
- 特定非営利活動法人ビッグイシュー基金、スポーツフォーオーシャルインクルージョン実行委員会 (2015), 『ダイバーシティカップ報告書』, 特定非営利活動法人ビッグイシュー基金、スポーツフォーオーシャルインクルージョン実行委員会
- 中村未絵 (2015), 「多様な背景や年齢を超えてつながる、ストリートサッカーの可能性 (前編)」 ビッグイシュー日本編『The Big Issue』262号, 26頁
- 中村未絵 (2015), 「多様な背景や年齢を超えてつながる、ストリートサッカーの可能性 (後編)」, ビッグイシュー日本編『The Big Issue』263号, 26頁
- 長谷川知広 (2011), 『ホームレスワールドカップ2011パリ大会日本代表ー野武士ジャパンプロジェクト応援についてー』, 特定非営利活動法人ビッグイシュー基金
- 稗田和博 (2015), 「ボールがつなぐ、社会と人間の多様性」, ビッグイシュー日本編『The Big Issue』269号, 20頁
- 水島宏明 (1990), 『母さんが死んだ』, ひとなる書房
- 水島宏明 (2007), 『ネットカフェ難民と貧困日本』, 日本テレビ放送網株式会社
- 水島宏明 (2015), 「英では貧困は政治が撲滅すべき対象 日本でも『貧困報道』を定着させよう」, 朝日新聞社編, 『Journalism』第294号, 75-82頁

Poverty and Sport : Stories from the Homeless World Cup

Chiaki OKADA

The Homeless World Cup is becoming one of the famous sporting events held annually for participation of homeless people in the world. Over 600 homeless players from a total of 65 countries played in the 2015 event in Amsterdam. According to the Homeless World Cup Foundation, the sense of empowerment that comes from participating in street football helps homeless people see that they can change their lives (Homeless World Cup Foundation Official Web Site).

The foundation has 74 national partners that conduct activities and programs for poverty reduction or social development in each of the 74 countries. As the situation of poverty and even the definition of poverty vary in different areas of the world, the national partners have significant roles in providing domestic programs based on their grass roots needs.

The purpose of this study is to verify the stories sent by some media, such as 1) Web pages (Official Web Site, Facebook and Blog), 2) Images and Pictures (YouTube, Videos), 3) Dramas. Field studies were conducted from January 2011 to August 2015 on 54 related persons totally, mainly by personal interviews.

In the first section, outlines of the Homeless World Cup and the Japanese team are given. Based on this, I verify the contents of these stories and discuss the characteristic of the media itself. In many web page contents, I can find the contrast between the tough lives of the players, and the bright smiles of the players in photos and videos. The balance of their severe present situations and the ambiguity with which they look forward to a better future show us a glimmer of hope in the fight against poverty. Additionally, the life episodes of each player give us clearer understanding of poverty issues, and we can well imagine the importance of the Homeless World Cup for each player.

In conclusion, the core significances of the Homeless World Cup are the image it projects, its role as a device and a hook to support the national partners in resolving issues related to poverty in each country, from the grass roots, using football. Moreover, the Homeless World Cup offers the opportunity for participating players to gain self-esteem, the trust of others, and hope and pleasure in sharing sport experiences.